様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月１１日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2008～2011
課題番号：20243028
研究課題名（和文）
アダプティブ・ガバナンスと市民調査に関する環境社会学的研究
研究課題名（英文）
Environmental sociological study on adaptive governance and action research
研究代表者
宮内　泰介（MIYAUCHI TAISUKE）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50222328

研究成果の概要（和文）：
自然をめぐるガバナンスについて多くの現地調査を軸に研究した結果、多元的な価値を認めることが重要であること、また、ガバナンスのプロセスの中で試行錯誤とダイナミズムを保障することが大事であること、さらには、様々な市民による調査活動や学びを軸としつつ、大きな物語を飼い慣らして、地域の中での再文脈化を図ることが重要であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
Many of our field researches has revealed some important points of the governance of natural resources: 1. Recognizing plural values, 2. securing adaptive process, and 3. Re-contextualizing the story of resource management by implementing citizen's researches.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2009 年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2010 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2011 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
総　計	20,900,000	6,270,000	27,170,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：コモンズ、順応的管理、レジティマシー、自然再生、社会的モニタリング

１．研究開始当初の背景

人間と自然との関係は、多様な相互関係によって成り立っている。どういう自然が望ましいかについての固定的な解はなく、時代や地域に応じて、自然のあり方、自然と人間との相互関係のあり方は変化する。したがって、今後の自然管理を考えたとき、問題となるのは、どう合意形成していくのか、誰がどういう価値観でどう望ましい環境を決めていくのか、ということである。

今後の環境管理計画においては、単に管理対象と順応的にかかわる（アダプティブ・マネジメント）というだけでなく、かかわる社会の側のしくみもまた順応的に変化させる必要がある（アダプティブ・ガバナンス）ということである。

以上のような背景の中、今後の自然環境管理においては、アダプティブ・ガバナンスが求められているが、そのような視点での研究はこれまで日本ではなかった。また、アダプ

ティブ・ガバナンスにおいて鍵を握るであろう、市民・住民による調査についても、そのしくみ、具体的な方法論等について、研究・実践とも、緒についたばかりである。

２．研究の目的

本研究プロジェクトでは、縦軸としてアダプティブ・ガバナンスについて調査研究し、横軸として市民調査について調査研究する。

（1）アダプティブ・ガバナンス研究においては、自然環境にかかわる人間の側のしくみの変化に注目する。人間の側のしくみを柔軟に変化させながら、持続的に自然環境と関わってきているような事例をさまざまに集め、議論する。そしてそこから、今後のアダプティブ・ガバナンスの課題を明らかにする。

（2）「市民調査」研究においては、自然環境に限らず、市民調査の事例をいろいろ集め、市民調査の可能性や課題について議論する。同時に、自然やまちをめぐる人文・社会科学的な調査がもつ実践的な意味について、市民調査に限らずさまざまな事例を集めながら考える。

３．研究の方法

まず、共同研究のための理念とデザインに関するミーティングを開いた上で、アダプティブ・ガバナンス、市民調査それぞれについて現地調査と文献調査を繰り返す。それらの成果をそれぞれが持ちよって定期的な研究会を開催し、また、関連する研究者やNPO関係者の報告を受け、議論する。

４．研究成果

本研究では、研究メンバーによるさまざまな事例の詳細な調査を集め、議論することから、以下のようなことが明らかになった。すなわち、自然をめぐるガバナンスにおいては、多元的な価値のもと、柔軟なしくみによって自然環境管理を行うこと（アダプティブ・ガバナンス）の重要性があらためて認識され、さらにこのアダプティブ・ガバナンスにおいて重要な次の3点が明らかになった。(1) 試行錯誤とダイナミズムを保障すること。単一のしくみに任せないで、複層的なしくみに身を任せること。そうした試行錯誤を認めること。あいまいな領域を確保しておくこと。そうすることが、硬直化を回避し、しくみを動かしつづけることになる。(2) 多元的な価値を大事にし、複数のゴールを考えること。ある価値（たとえば「生物多様性」）から始めた活動も、柔軟なしくみのもとで、多元的な価値を大切にし、人びとの思いとか志といった質的なものや文脈を重視すること。思い切って問題をずらし、多元的な営みにしていき、そのことによって、複数の価値が並存して進む。(3) 多様な市民による調査活動や学びを軸としつつ、大きな物語を飼い慣らして、地域の中での再文脈化を図ること。グローバルな価値を鵜呑みにするのでも、頭から否定するのでもなく、自分たちの地域の文脈の中に埋め戻すこと。地域が主体になってその使いこなしをするためには、地域の中での学びや組織化が重要なポイントになる。

こうした成果は、2012年度中に出版物として刊行予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計59件）

①菊地直樹，野生復帰を軸にしたコウノトリの観光資源化とその課題，湿地研究，2，3-14，2012，査読有

②山本信次，多様な主体の協働ならびにビジネス化に基づく草地再生と茅葺職人養成—岩手県金ヶ崎町における取組みを事例として，岩大演報，42，15-24，2011，査読有

③星野麗子・山本信次，都市公園管理における多様な主体の協働—盛岡城跡公園管理体制を事例として，岩大演報，42，25-44，2011，査読有

④鈴木克哉・久保雄広，現場を動かす社会科学～野生動物問題解決に向けた実践と試行錯誤から～，Wildlife Forum，16（2），18-19，2011，査読無

⑤富田涼都，インタープリテーションは保全の現場で役に立つのか？—専門家と現場のコミュニケーションを中心に—，哺乳類科学，51巻1号，219-220，2011，査読無

⑥佐藤哲，流域の視点から自然と向き合う：民俗知と科学の相互作用，BIOSTORY，15，64-67，2011，査読無

⑦丸山康司・本巣芽美，風力発電の社会受容性—科学コミュニケーションの限界を踏まえた方策，年報科学・技術・社会，20，37-55，2011，査読有

⑧内藤和明・菊地直樹・池田啓，コウノトリの再導入－IUCNガイドラインに基づく放鳥の準備と環境修復，保全生態学研究，16（2），181-193，2011，査読有

⑨富田涼都，自然環境に対する協働における「一時的な同意」の可能性—アザメの瀬自然再生事業を例に，環境社会学研究，16，79-92，2010，査読有

⑩赤嶺淳，ワシントン条約における海産物—タツノオトシゴとナマコのエコ・ポリティクス，海洋と生物，186-32-1，16-24，2010，査読無

⑪鈴木克哉・山本信次・打越綾子・阿部豪，人と野生動物のあつれき解消にむけた社会

科学の役割と可能性，Wildlife Forum，15（1），2010，査読無
⑫関礼子，自然環境保全からみた漁村の多面的機能，地域漁業研究，49-3，91-106，2009，査読有
⑬松村正治，里山ボランティアにおける自由の条件―人間 - 植物関係の批判社会学試論，園芸文化，6，48-68，2009，査読無
⑭菊地直樹，コウノトリの野生復帰における「野生」，環境社会学研究，14，86-100，2008，査読有
⑮佐藤哲，環境アイコンとしての野生生物と地域社会，環境社会学研究，14，70-85，2008，査読有
⑯鈴木克哉，野生動物との軋轢はどのように解消できるか？―地域住民の被害認識と獣害の問題化プロセス，環境社会学研究，14，55-68，2008，査読有
⑰丸山康司，「野生生物」との共存を考える，環境社会学研究，14，2008，査読有

〔学会発表〕（計 90 件）

①富田涼都，環境倫理学から見た滋賀県水田地帯の環境保全政策の位置づけ―『誰が』生態系サービスを享受するのか？，日本生態学会，2012 年 3 月 18 日，龍谷大学瀬田キャンパス，大津市
②宮内泰介，自然環境と地域社会の相互関係：宮城県北上川河口地域の事例から，「環境、人類生態與社會文化変遷」系列活動（「環境・人類生態と社会・文化の変化」ワークショップ），2011 年 10 月 25 日，中興大学，台湾
③富田涼都，生態系サービスによる「人と自然のかかわり」評価の可能性と課題，日本環境ジャーナリストの会「生態系サービスをどう報道するか」第三回セミナー，2011 年 8 月 22 日，地球・人間環境フォーラム，東京都
④Miyauchi, Taisuke.，Managing a livelihood combination and common pool system:A case study of local sustainable development in fishing villages in the Jusanhama area of Miyagi,Japan，International Symposium on Society and Resource Management，2011 年 6 月 15 日，Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu マレーシア
⑤丸山康司・西城戸誠・柏谷至・藤公晴，再生可能エネルギーと内発型発展，環境社会学会，2011 年 6 月 4 日，関東学院大学，横浜市
⑥富田涼都，順応的管理における自然の「リスク」は受け容れられるのか？―自然再生事業を例に，野生動物管理システムフォーラム，2011 年 5 月 27 日，東京農工大学府中キャンパス，府中市
⑦Miyauchi, T., Legitimacy and environmental governance :A case study of the reed bed of Kitakami River., The Third International Conference on Forest Related Traditional Knowledge and Culture in Asia, 2010 年 12 月 15 日，石川県政記念しいのき迎賓館，金沢市
⑧Kitoh, Shuichi，Environmental Ethics on dynamic relationship and combination of human and nature，独日統合学術学会 第7回シンポジウム，2010年11月12日，ミュンヘン工科大学（ドイツ）
⑨松村正治，市民参加による里山保全の社会学，2010年代のための里山シンポジウム―どこまで理解できたか、どう向き合っていくか，2010年10月31日，大阪市立自然史博物館，大阪市
⑩立澤史郎・手塚賢至・荒田洋一・牧瀬一郎・川崎勝也，ヤクシカの個体群管理は可能か？―市民調査主導の意義と課題，野生生物保護学会・日本哺乳類学会合同大会，2010年9月20日，岐阜大学，岐阜市
⑪Suzuki, K. and Muroyama, Y., Case Study Report: Crop Damage by Japanese Monkeys, International Primatological Society XXⅢ Congress Kyoto 2010, 2010 年 9 月 15 日，京都大学，京都市
⑫Miyauchi, T., Interaction between forest resource use and social systems:Based on a case study of the Solomon Islands., XXIII IUFRO World Congress., 2010 年 8 月 24 日，ソウル・COEX
⑬Sato, T.Takahashi, K.Takahashi, D.Mikami, K., Regeneration of Satoyama ecosystem services as an educational resource., 2nd International Conference of Urban Biodiversity and Design., 2010 年 5 月 18-22 日，ウインクあいち，名古屋市
⑭富田涼都，研究者は「なぜ」・「どうやって」地域に入るのか？―「関わり」からみる保全，日本生態学会第57回全国大会，2010年3月18日，東京大学，東京都
⑮菅豊，資源としての『自然』と『文化』―客体化され管理される対象の異質性と同質性―，第8回現代民俗学会研究会，2010年11月27日，東京大学，東京都
⑯菊地直樹，包括的再生としてのコウノトリの野生復帰，2009年度地理科学学会秋季学術大会シンポジウム，2009年11月28日，広島大学，東広島市
⑰菅豊，日本のコモンズと環境変動―サケの資源利用を題材に―，史学会，2009年11月7日，東京大学，東京都
⑱富田涼都，環境保全における過去の人間の営みの再評価に関する考察―アザメの瀬自

然再生事業を事例に，野生生物保護学会第15回大会，2009年11月7日，日本獣医生命科学大学，東京都

⑲Taisuke MIYAUCHI, Various uses of natural resources and the common property system:a case study of natural resources in malaita, solomon islands, The Second International Conference on Forest-Related Traditional Knowledge and Culture in Asia, 2009年11月2日，Kunming Institute of Botany, 昆明（中国）

⑳菅豊，「半」の思想の復権―「入り会う」ことの可能性，東日本入会・山村研究会，2009年8月28日，仙台市太白区市民センター

㉑Miyauchi, T., Legitimacy and environmental governance: A case study of the reef bed of Kitakami River, Japan, 15th International Symposium on Society and Resource Management, 2009年7月6日, Austria Center Vienna, ウィーン（オーストリア）

㉒Taisuke MIYAUCHI, Legitimacy and environmental governance: A case study of the reef bed of Kitakami River, Japan, 15th International Symposium on Society and Resource Management, 2009年7月6日，Austria Center Vienna，ウィーン（オーストリア）

㉓菊地直樹，コウノトリの野生復帰という多元性，環境三学会合同シンポジウム2009，2009年6月28日，名古屋大学，名古屋市

㉔佐藤哲・高橋一秋・高橋大輔・三上光一・外崎健，里山生態系サービス創出のためのツールキット作成の試み，日本景観生態学会第19回大会，2009年6月27日，新潟

㉕丸山康司，山本光夫，飯田誠，環境問題を解決する現場における異分野融合の可能性と課題，環境社会学会第39回セミナー，2009年6月27日，名古屋大学，名古屋市

㉖AKAMINE, Jun, “The politics of sea cucumber foodways heritage, International conference on intangible heritage Pico Island, Azores, Portugal, 2009 年 5 月 29 日, City Hall of Madalena, Portugal

㉗佐藤哲，エコツーリズムを通じた環境モニタリングと生態系サービス管理と活用の可能性―釧路湿原の事例から，日本地理学会春季学術大会，2009.3.22-23，八王子・帝京大学

㉘鈴木克哉，対人関係が獣害問題を深刻化させる―軋轢解消にむけた社会科学的アプローチの可能性，第 56 回日本生態学会大会，2009.3.18，盛岡市・岩手県立大学

㉙関礼子，自然環境保全からみた漁村の多面的機能，地域漁業学会，2008. 11.9，広島大学・東広島市

㉚鈴木克哉，獣害に対する地域住民の複雑な被害認識と問題化プロセス，第 14 回野生生物保護学会大会，2008.11.8-9，佐世保市・長崎国際大学

㉛Miyauchi, Taisuke, The Variety of Uses and Institutions: A Case Study of Natural Resources in Kitakami River Mouth Area, Northern Japan, The 1st International Conference on Forest Related Traditional Knowledge and Culture in Asia, 2008.10.7, Korea Forest Institute, Seoul, Korea

㉜Maruyama, Yasushi, Social Acceptance and Social Innovation in Wind Power Technology, 7th World Wind Energy Conference 2008, 2008.6.24, St. Lawrence College, Kingston, Canada

㉝Maruyama, Yasushi, Dynamic Relation between Man and Nature: Case Study of Wild Monkey in Japan, the Conference Preservation of Biocultural Diversity, 2008.5.6, University of Natural Resources and Applied Life Sciences, Vienna, Austria

〔図書〕（計 40 件）

①赤嶺淳，『クジラを食べていたころ―聞き書き　高度経済成長期の食とくらし』，グローバル社会を歩く研究会，2011，223

②赤嶺淳・森山奈美編，『島に生きる―聞き書き　能登島大橋架橋のまえとあと』，グローバル社会を歩く研究会，2011，191

③松村正治・藤田廣子・福富洋一郎，『写真で見る自然環境再生』，オーム社，2011，168

④宮内泰介，『開発と生活戦略の民族誌―ソロモン諸島アノケロ村の自然・移住・紛争』，新曜社，2011，345

⑤三俣学、菅豊、井上真，『ローカル・コモンズの可能性―自治と環境の新たな関係―』，ミネルヴァ書房，2010，384

⑥赤嶺淳，『ナマコを歩く―現場から考える生物多様性と文化多様性』，新泉社，2010，392

⑦宮内泰介，『半栽培の環境社会学―これからの人と自然』昭和堂，2009，257

⑧鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』，東京大学出版会，2009，287

⑨関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中求編『環境の社会学』，有斐閣，2009，284

〔その他〕

ホームページ等

http://miya.let.hokudai.ac.jp/ada/

６．研究組織

(1)研究代表者

宮内 泰介（MIYUCHI TAISUKE）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50222328

(2)研究分担者

鬼頭 秀一（KITOH SHUICHI）
東京大学・新領域創成科学研究科・教授
研究者番号：40169892

佐藤 哲（SATOH TETSU）
長野大学・環境ツーリズム学部・教授
研究者番号：10422560

菅 豊（SUGA YUTAKA）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：90235846

関 礼子（SEKI REIKO）
立教大学・社会学部・教授
研究者番号：80301018

赤嶺 淳（AKAMINE JUN）
名古市立大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号：90336701

立澤 史郎（TATSUZAWA SHIROU）
北海道大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：00360876

丸山 康司（MARUYAMA YASUSHI）
名古屋大学・大学院環境学研究科・准教授
研究者番号：20316334

松村 正治（MATSUMURA MASAHARU）
恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：90409813

菊地 直樹（KIKUCHI NAOKI）
兵庫県立大学・自然・環境科学研究所・講師
研究者番号：60326296

鈴木 克哉（SUZUKI KATSUYA）
兵庫県立大学・自然・環境科学研究所・助教
研究者番号：80447896

山本 信次（YAMAMORO SHINJI）
岩手大学・農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター・准教授
研究者番号：80292176

(3)連携研究者

福永 真弓（FUKUNAGA MAYUMI）
大阪府立大学・21 世紀科学研究機構・准教授
研究者番号：70509207

富田 涼都(TOMITA RYOTO)
静岡大学・農学部・助教
研究者番号：20568274